

<第 82 回 HSE セミナー 講演内容>

■テーマ：「岐路に立つ薬剤師の役割と今後の展望」

～ドラッグストアからみた地域住民ファーストの取り組みと狙い～

■講師：横田 敏 氏（日本チェーンドラッグストア協会/日本リテイル研究所 部長）

2016年は薬局にとって大きなターニングポイントを迎えた。「薬局改革元年」と題された報酬改定でのキーワードは「対物から対人」である。新設された「かかりつけ薬剤師」や「調剤基本料区分の細分化」によって門前薬局の苦戦する声が聞こえる。「院内の方が患者の利便性がいい」そんな声まで聞こえてくる。さらには、解禁目前の「インターネットによる医療用医薬品の販売」「遠隔服薬指導」も控えている。「予防・医療・介護」が求められる中、いち早くドラッグストアが取り組みを見せている。果たして「薬局だから必要だ」という主張が通じるのだろうか。質・サービスとともに現状に対応してきたドラッグストアの動向から目が離せない。知らず知らずに処方せんは流れている。医師の処方せんに頼らず、「人が集まる、集める」仕組みを一緒に考えたい。

<講師紹介>

日本チェーンドラッグストア協会 第3事業部部長

1981年 専修大学文学部英米文学科卒業

1981年 (株)薬事新報社入社、1986年週刊「薬事新報」編集長就任

1988年 (株)薬局新聞社入社、1996年同社取締役編集部長就任

1999年(株)日本リテイル研究所に入社、現在、(株)日本リテイル研究所取締役編集・出版部部長

■テーマ：「健康サポート薬局公表に向けて薬局薬剤師への期待」

■講師：山口 育子 氏（認定NPO法人ささえあい人権センターCOML 理事長）

10月から健康サポート薬局が始まる。果たして国が思い描いていた薬局像がそこにはあるのだろうか。調剤報酬改定と議論の時期が重なり、現場で大きな混乱を生んでいるのは言うまでもない。資格取得に殺到する薬剤師たちは何を考え、何を求めているのだろうか。散々の議論を生んだOTCの販売について、薬局に求められる姿をもう一度考えてみたいと思う。これだけ業界に対する厳しい声が聞こえてくるなか「形だけの制度」はもういらぬ。本当に求められる「健康サポート薬局」でないと、国も国民も認めてくれないのではないだろうか。議論の中心にて薬局への期待を発信してくれていた講師に、薬局・薬剤師への「患者の声」を代弁してもらおう。

<講師紹介>

大阪市生まれ。自らの患者体験から、患者の自立と主体的医療への必要性を痛感していた1991年11月COMLと出会う。活動趣旨に共感し、1992年2月にCOMLのスタッフとなり、相談、編集、渉外などを担当。2002年4月に法人化したNPO法人ささえあい医療人権センターCOMLの専務理事兼事務局長を経て、2011年8月理事長に就任。

社会保障審議会医療部会委員、健康情報拠点薬局のあり方に関する検討会委員

■テーマ：「2025年に向けた地域包括ケアシステムにおける薬局の役割」

■講師：鈴木 邦彦 氏（公益社団法人 日本医師会 常任理事）

2013年秋の大阪、「母屋でおかゆをすすり、離れですき焼きを食べている」と、小泉政権時代の財務大臣である塩川正十郎氏の言葉を揶揄した薬局批判を覚えている人は多いのではないのでしょうか。診療報酬・調剤報酬と一つのπを争う関係にあり、過激な論争になることは仕方がないとして、果たしてその舌戦が医療貢献への根幹となるのかが今後求められるのではないだろうか。お互いの主張を通し続けても溝が深まるばかりである。では、日本医師会の求める薬局のあり方、薬剤師の存在はどのようなものだろうか。問題の核心を知らずして、日本の医薬分業が前に進むことは出来ない。歯に衣着せぬ話を真っ向から受け止めて、考える機会としたい。

<講師紹介>

1984年秋田大学医学部卒業。仙台市立病院、東北大学第三内科、国立水戸病院を経て、1996年志村大宮病院院長、1998年医療法人博仁会理事長に就任。2009年から中央社会保険医療協議会委員、2010年から日本医師会常任理事を務める。病院経営だけでなく、介護老人保健施設、地域包括ケアセンター、学校法人と幅広く経営をしている。現在は、社会保障審議会介護給付費分科会臨時委員を務めている。